

## 照明学会創立95周年を迎えて

Greeting to Celebrate the 95th Anniversary

正会員 大野 智彦

照明学会会長・中部電力㈱代表取締役 副社長執行役員  
Tomohiko Ono



本年11月29日に照明学会は創立95周年を迎えることができました。これも照明学会が社会の要請に適正に対応してきた証左だと思います。歴代会長を始めとする学会諸先輩、関係各位、そして会員の皆さまの永年にわたるご努力に対し、感謝申しあげます。

当学会は、1916（大正5）年に神田一ツ橋学士会館において産声をあげました。この1916年という年は、アインシュタインが一般相対性理論を完成した年として有名ですが、わが国では、東京帝国大学教授吉野作造が雑誌『中央公論』で民主の福利をはかるのが政治の目的だとする「民本主義」の主張を発表した年です。この論文は、世界的なデモクラシーの風潮と日本の護憲運動の動きを結びつけ、以後の「大正デモクラシー」の運動に大きな影響を与えました。日本においては、従来の諸制度・諸思想の改革が試みられた時代でした。

照明についていえば、東京市内に電灯がほぼ完全に普及したのが1912年のことでしたので、日本において照明器具がランプから電灯へ交代していく最中、その普及を目指し当学会は設立されたといえます。

当時の状況を、『ごんぎつね』で有名な新美南吉が『おじいさんのランプ』という小説に書いています。この小説は、愛知県半田町に電灯が始めてついた時の模様をランプ屋の巳之助の心の戸惑いや葛藤を通じて表現した名作です。巳之助は、最初ランプの敵（かたき）として電灯反対の意見を村人にまくしたてますが、結局、電灯という新しい価値を認め、ランプ屋を廃業します。そして巳之助はその時の心境を次のように孫に語ります。「日本がすすんで、自分の古い商売がお役に立たなくなったら、すっぱりそいつをすてるのだ。いつまでもきたなく古い商売にかじりついていたり、自分の商売がはやっていた昔の方がよかったといったり、世の中のすすんだことをうらんだり、そんな意気地のねえことはけっしてしないということだ」。

巳之助の心境は、変化へ対応するうえでの心構えとして大いに参考になります。いかに栄えた企業や組織そして国でさえも、ある程度の年数が経過すると、消滅せざるを得ないということは、歴史が物語っています。その中で、企業寿命を越えても発展・持続していく企業や組織も数多くあります。それらに共通するのは、変化への対応力です。ダーウィンの進化論を引用するまでもなく、変化に対応できるものこそ生存可能なのです。

周知のとおり、私ども照明学会もかつてないほどの変

革の要請に直面しています。対外情勢の変化に加え、照明デバイスの変化もあり、まさしく創業時と同様ともいえる変化の波に対応していく必要があります。

具体的には、まず新法人化への対応があります。非営利の一般社団法人への移行準備とそれに伴う内部組織の変革を進めていかなければなりません。次に、環境重視の国際世論の高まりです。これに関連した、エネルギー政策の変化に対する対応も重要です。そして、LED、ELなどに代表される新照明デバイスへの対応です。さらには、若い世代の理工系離れや、大学との照明関連教育の現状を踏まえた次世代教育への対応も検討する必要があります。当学会が今後も持続的に発展していくことができるかどうかは、こうした変革の要請にいかに対応できるかにかかっているように思います。巳之助のような潔い割り切りも必要になってくるでしょう。会員の皆さまのご理解・ご支援をお願い申しあげます。

ところで、本年3月11日に発生した東日本大震災からもう半年が過ぎました。依然避難生活をされておられる方々に対しては心よりお見舞いを申しあげます。この震災は、照明に対して一般の方々の注目を集めるきっかけになりました。1つは被災直後の停電で真っ暗な中にともった電気の明かりに向かう笑顔の映像です。1個の照明が人の心を明るくし、将来への希望につながることを感じさせました。また、計画停電の混乱の後、東北地方や関東地方では電力使用制限令が発動されました。これによって、節電が強化され、照明についても改めて関心が高まりました。こまめに消すという基本的な節電行動によって、自宅やオフィスの照明器具がどこにあるかが認識されました。省エネのための器具への関心が高まり、家電店の棚から白熱電球が押し出されLEDが全面に並べられるようになりました。照明の明るさやその効果に対しても関心が増し、効果的な照明方法という視点で、評価されるようになりました。

今、世間では照明にかかわる情報が求められています。当照明学会も、この夏、具体的な節電方法の考え方を提言したところです。適切な情報を発信し、世の中のお役にたてる大切な機会であるともいえます。会員の皆さまにも改めて多面的に、技術・理論を研究、開発していくことで、世の中に貢献していただき、次なる100周年に向け、当学会の持続的発展につなげていただけることを期待するものであります。